史遊会通信

NO.185
平成22年
3月15日
発行

事務局
☎
03--3712
0651
下山田方

二月講演要旨

千葉一族

平山善之

千葉氏は桓武平氏である。

桓武帝の曾孫、高望王は寛平元年（八八九）平の姓を賜り、上総介となって関東に下る。五代目の常将が千葉小次郎と呼ばれ、千葉氏の初代とされている。

常将から四代目、常重が千葉郷亥鼻台上に館を築いた。その子常胤から十三代、三三〇年間、ここを本城としたが、享徳四年（一四五五）内紛で焼討ちされ、当主胤直父子は香取郡多古で自害、家督は従弟輔胤に、本拠地は印旛郡佐倉へ移った。

その後一三五年、天正十八年（一五九〇）小田原北条氏滅亡と共に歴史から消える。

代々の当主は下総介を称し、「千葉介」と呼ばれた。

常胤、広常

常胤は「人となり重厚にして勤倹、衣服器用質素にして奢らず」と評された。

頼朝が石橋山の合戦に敗れ房総へ舟で逃れたとき、いち早く六人の息子と三百騎の手勢を率いて味方に参じた。

頼朝は喜び「父とも思うぞ」と言った。この思いは終生変わらず、功臣を賞するに常に首位を以ってし、また「常胤を見習え」というのが口癖だったという。

常胤も息子たちと、西海の源平合戦や奥州の藤原氏追討などで、他に先駆けて働いたから、鎌倉幕府内で重きをなした。

例会のお知らせ

◎　3月　出版祝賀会

『歴史のみち草』出版祝賀会を左記により開催いたします。

日　時　平成22年3月22日（月）
　　正午～午後2時

会　場　学士会館

会　費　7千円　会場にて集金

3月の自由執筆は、高橋（由）・新井・松川の諸氏　締切り3月末。

◎　4月例会

日　時　平成22年4月28日（水）
　　午後6時～8時

会　場　目黒区民センター　7階

テーマ「『歴史のみち草』を読んで」

4月の例会は、『歴史のみち草』読後感想会です。従って先月お知らせした講演の担当月が一ヶ月ずつ繰りさがりますのでご諒承ください。

自由執筆は島津隆子・森下征二・千坂精一の諸氏　締切りは4月末。

同じく千葉小次郎常将から五代目の広常は上総介で、上総氏を称していた。上総は武器となる良馬と鉄に恵まれ、動員兵力も多かった。

しかし頼朝への対応は常胤と大きく違った。彼が二万騎という大部隊を率いて頼朝のもとへ伺候した時は、既に関東一円がその旗風に靡く形勢となっていた。頼朝はひどく不機嫌であったという。

広常は態度も大きかった。その昔、頼朝の父、義朝が上総に住んでいたころ、一緒になって遊びまわった思い出が忘れられず、他の御家人のように辞儀を低くはできなかった。頼朝に出会っても下馬の礼をするなどということは「公私共に三代の間、未だ其礼をなさず」と多勢の前で嘯いたという。（吾妻鏡）彼は失脚した。

おそらく常胤、広常二人の両総平氏が相並んで営中に威を振るうことを喜ばぬ者が讒言したのであろう。広常は頼朝の命で誅殺されてしまう。のち冤罪と解り、頼朝も後悔して、上総氏の名跡と領地はお気に入りの常胤の孫、常秀に継がせた。

両総平氏の勢力半減を企んだ者は失望したであろうが、また機会はやってくる。

上総氏をついだ常秀の子秀胤は三浦氏の娘を妻にむかえた。北条氏は頼朝なきあと、梶原、畠山、比企、和田と有力御家人を次々と葬ってきたが最後に三浦一族を挑発し、ついにこれを討つ機会を迎えた。宝治の合戦（宝治元年〈一二四七〉）である。北条時頼の狙いは、三浦氏よりも上総氏ではなかったか。妻の縁で秀胤が三浦と共に立つ、これを討つことが北条氏の本当の狙いであったと私は思う。罠に嵌り敗れた上総氏の所領は執権北条氏により、足利ら他の御家人に分け与えられた。千葉勢力は半減した。

頼胤、東（とうの）常縁（つねより）

頼朝は常胤を鎮西の監職とし、肥前国小城郡晴気城を与えた。以来子孫代々小城郡の地頭でもあった。文永十一年（一二七四）蒙古襲来するや幕府は全国に動員令を下す。肥前の地頭たる千葉氏は当主頼胤自ら嫡男宗胤をつれて出陣したが、戦傷がもとでその翌年三十七歳で没する。

千葉の留守は幼い次男胤宗が守っていた。しかし蒙古はいつ来るか解らず、宗胤の九州滞陣が長引くうち、胤宗も成長する。結局宗胤は千葉介を弟に譲らざるをえなくなってしまった。宗胤の子孫は肥前千葉氏となる。（末裔は鍋島の家臣として残った。）宗胤の子が胤貞、胤宗の子が貞胤。

尊氏の頃、胤貞は足利方、貞胤は新田方と別れたが、貞胤は新田滅亡の後足利に帰服、本領維持するを得た。

東氏は千葉一門である。

常胤の六男、胤頼が北総東端の東庄を領し、東氏を名乗った。承久の乱の功で美濃国郡上の地を貰い、東庄と併せて領有していた。

常縁は美濃に常駐していたらしい。代々歌人を以って聞こえていた。宮中にも出入りし、公卿たちとも付き合い深かった。古今伝授の二条家からその資格を許され、連歌師宗祇に古今集を教えたことで名高い。但し単なる歌人というだけでなく、武人としても実力があった。

この頃関東で足利成氏が乱を起こし、千葉家にも内紛が起こった。常縁は将軍義政の命を受け、これを鎮めるために関東に下った。彼は上杉方の千葉介胤直を殺した成氏派の康胤と村田川畔で戦いこれを破った。本領である東庄の経営や千葉家の行方も気になっていたであろうが、郡上が美濃守護代に奪われる事件が起こり慌てて帰る。

常縁の子孫にも内紛や無嗣断絶等あったが、遠藤氏の名で江州三上一万石として明治にいたり、明治に東氏に復している。

胤直、康胤

享徳四年（一四五五）の千葉家の内紛は、円城寺、原という重臣同士の確執から始まり、前者を支持した千葉介胤直、原に組した馬加康胤が対立したものと云われる。康胤には家督への野心もあった。結局胤直が、亥鼻城を襲われ、息子胤宣、弟賢胤と共に多古に逃げるもそこで殺される。

これには古河公方足利成氏と上杉氏の対立が大きく関っていた。胤直は成氏と上杉が対立するや、母が上杉氏の為、上杉方についた。そこで康胤・原は成氏方につき、その兵を借りて亥鼻城を焼討ちした。義政は成氏、康胤討伐を常縁に命じたのである。

康胤の流れが千葉介を継承していくが、最後まで成氏と子孫即ち古河公方の味方であった。一方、胤直の弟賢胤の子らが上杉氏を頼り、道灌の配慮で武蔵千葉氏を興し志村に城を築く。

胤直は本城を焼討ちされて、何故多古に逃げたのだろうか。

多古は北総きっての水田地帯である。古くは「千田庄」と呼ばれたように広い田が広がり、現在も多古米といえば県下随一のブランドである。千葉氏歴代は多古城、嶋城等を設け、この地を重んじてきた。また、印旛沼を中心に佐倉も広い水田地帯を有する。しかし佐倉は当時馬加康胤の勢力範囲にあった為、胤直は多古へ落ち延びた。

胤直三十七歳。「千葉家世紀」という本では「性粗暴にして、群下に礼なく、ために人心を失う」、また康胤については「才文武を兼ね威厳ありて諸人に重んぜらる」とある。また「千葉実録」なる本では康胤を「主君の家を滅ぼし奉りて栄華を極むること天罰恐るべし、とて世人挙ってにくみけり」とある。

彼は常縁に敗れ討ち死するが、世は下克上の時代、主殺しなど珍しくも無かった。

輔胤、重胤

輔胤は、佐倉時代の千葉氏のなかでは出色の人物。康胤の子ながら、常縁が美濃へ還ったため、千葉介となった。本佐倉城を築き、家督を子孝胤に譲った後も長生きして七十二歳で死んだ。

文明三年（一四七一）、古河公方成氏は上杉方に古河城を落とされ、輔胤・孝胤父子を頼る。輔胤の本佐倉城は印旛沼に面し、水利四方八方へ繋がっていた。古河も舟で通じており、輔胤の手の者が導いたのではなかろうか。この時期、成氏は何処に居住したのか？　四通りの説があるが、確証はない。私は本佐倉城の城内、現在土地の人が「セッテイ山」と呼ぶ一郭だろうと、考えている。セッテイは接待の訛ったものであろう。防備厳重な郭である。発掘調査の際、碁石、茶壺、火箸などが出土している。

輔胤から八代目が最後の千葉介、重胤である。この頃は家勢既に衰え、その前二代は小田原から後北条氏の娘を妻に迎え、実質後北条家の配下にあった。重胤は十歳で父邦胤が家臣に殺されたため、家督を継いだが、小田原に人質となって、天正十八年（一五九〇）の小田原落城をむかえる。

小田原滅亡後、北総を含む関東一円は家康に帰し、千葉氏及び家臣は浪人した。家臣は他家に仕えた者もいたが、大半は帰農し庄屋クラスになった。佐倉惣五郎として知られる木内宗吾もその子孫である。

重胤は寛永十年（一六三三）江戸の陋巷に嗣子なく死に、弟俊胤の子孫が鏑木姓で神職として残ったという。

自由執筆

琉球民族の悲劇

隆　恵

昨年の民主党への政権交替で、自民党が米国と沖縄県とで取り決めた普天間基地の移設問題が、民主党が公約にうたった「他の移設先を探す」を模索しているため、米国の反発を呼び、日米同盟の根幹が揺らぐのではと問題となっている。

実は、二国間の合意事項を根本的に覆す事の至難さから、民主党は県外移設の明言を避けたのだが、連立を組んだ少数党の国民新党と社民党は、数少ない国会議員に沖縄県出身者を抱えているため、県外移設を強硬に主張し、民主党も県内移設でのソフトランディングができなくなってしまった。この状況に対して、鳩山首相は開けたら収拾がつかなくなる「パンドラの箱」を開けるから、迷走を余儀なくされたと非難する声がある。

米軍基地の過半数は沖縄県にあるそうだが、これについての本土の我々（大和民族）は、「気の毒だなあー、とは言え日本の防衛上は米軍の駐留は必要で、駐留米軍の消費経済と日本政府の大型財政支援で沖縄経済が潤っているのだから、騒音程度は我慢すべし」と今でも大半の人は思っている筈である。しかし、この考え方は完全に本土の全くのエゴである。この問題は、自分の住む地域にはごみ処分場や原子力発電所の建設は困る、必要なのは分かるが迷惑なので、他人の住む地域に建設してくれ、と言うエゴとは全く異次元の、国家的な大問題なのである。

琉球民族の歴史を簡単に紐解くと、実に気の毒な民族と言わざるを得ない。

歴史上登場する琉球国は、独立国として中国の明・清に朝貢する傍ら、日本（薩摩藩）にも朝貢して何とか独立国を維持していた。しかし、明治初期沖縄藩とされ琉球王国は滅亡する。

太平洋戦争では、米軍の真っ先の攻撃の矢面に立たされ全島が焦土と化す。敗戦後は米軍の統治下に入り、本土が一早く占領から開放されても、米軍の占領を受け続け、米国から開放されるのは、一九七二年である。その返還の前提条件となったのは、既存の米軍の主要基地を存続させることであり、その結果が、今日の沖縄県の様相となったのである。戦後の万年政権与党の自民党は、米軍基地の列島シフトは列島の猛反対が確実であるので、既成事実化している沖縄県内での移設と一部グァムへの移転でお茶を濁したのである。

要するに、日本の大多数の大和民族の対外防衛の負担を、わが国に編入されて未だ一五〇年未満の少数民族の沖縄民族にさせて、更に今後も継続しようとしたのが「普天間基地の名護市辺野古移設案」である。

以上が冷静な歴史観と思うが、だとすると次のように総括できるのではなかろうか。

琉球民族は日本国に吸収されて、即ち薩摩藩の属領とされて約四〇〇年、琉球県となって約一四〇年、租税を収奪され続け、人命と財産を保護してくれると思いきや、真っ先に他国の攻撃と占領を受け、占領から開放されても「宗主国」日本列島の戦略上の最大の防衛拠点としての犠牲を求められているわけである。こう考えると、今回の民主党の混迷振りを非難するだけでなく、同じ民族として公平な負担を、列島の大和民族も負う責任があると思う。

自由執筆

桜井茶臼山・壱与（臺與）・磐余王朝

中山　喬央

結論

桜井茶臼山古墳の被葬者は壱与であり、彼女は磐余王朝の創始者である。

理由

① 桜井茶臼山古墳の年代は二期に入る。

② 桜井茶臼山古墳の祭祀関連副葬品及び出土遺物は抜群の内容である。

③ 壱与は卑弥呼の宗女である。

④ 磐余とは桜井茶臼山古墳の西南から香具山の東側一帯にかけての地方を指し神日本磐余彦（かむやまといわれびこのすめらみことし）天皇と諡号された神武天皇がいる。更に神功皇后、十七代履仲天皇、二十二代清寧天皇、二十六代継体天皇、三十一代用明天皇が皇居を設けたのである。

説明

この四つの理由を結びつけたのは、桜井茶臼山古墳に於ける二百キログラムを超える水銀朱の出土であった。水銀は辰砂（しんしゃ）を焼いてつくる。常温で液体を保つ唯一の金属であるが、古来より赤色顔料、薬品等として珍重され極めて高価なものであった。

和田維四郎著『日本鉱物誌』によると、辰砂の産出地として伊勢三重郡水江村、大和宇陀郡駒帰村、大和多武峰、大和宇陀郡曽爾村が挙げられており、特に駒帰村産のものについては、「石英脈中に染鉱し、其の空隙においては微細なる結晶の点在するものあり、透明にして美麗なり」と述べられているが、これらが発掘焼成されて使用されたことは間違いないものと考える。

一方磐余を地盤にした豪族に安倍氏がいる。ここは又東国への交通路と南北の街道が交差する地点でもあり、交易の要としての経済効果を享受できる場所でもあった。

この結果、莫大な経済力を保持することになった安倍氏の勢力が、他の豪族よりも優った時には、この磐余の地に王宮を置くことが出来たのである。

先ず最も卓越した時期が桜井茶臼山古墳の時代で、鏡八一～壱百面、玉杖、水銀朱二百キログラムの出土は、どれ一つをとっても抜群の祭祀用副葬品であり、それらを三つも兼ね備えた被葬者は、古墳の年代から壱与以外を考えることは出来ないのである。

あとがき

最近桜井茶臼山古墳出土鏡片の記事が新聞紙面を賑わした。先ず鯨さんから次いで三戸岡さんからも意見を求められた。

一方でマスコミ考古学という言葉を耳にするようになった。要は発表者が自分の考え通りに大きく発表してくれるマスコミに優先して情報を流し、大きく報道されることにより、研究面で優位をかちとろうとするものである。

この風潮を苦々しく思っていた矢先だったので、思わずご両所に厳しい感想を述べたところ、それなら自分はどう考えるか発表してみろということになり、紙面を汚した次第である。

とはいうものの、今を去る十五年前に吉村ゼミで「磐余のいわれ」のレポートを提出し、十年前には玉杖の出土古墳として桜井茶臼山古墳を勉強した小生にとっては、今回拙文をしたためる為に訪問した茶臼山・メスリ山を始めとする古墳群、安倍文殊院、履仲天皇ゆかりの稚桜神社を始めとする磐余の地は思い出深いものとなった。

自由執筆

明治二十四年の無尽講

鍋屋　次郎

秋葉神社から秋葉街道を一路南へ歩くと遠州森町に出る。秋葉街道には、今も当時の「常夜灯」が所々に残っていて、往時を偲ばせてくれる。

森町からは東へ向かうと東海道掛川宿へ、南は見付（現磐田市）宿へ、西へ向かえば二俣を通って浜松へと道路は通じ、当時森町は北遠での交通の要衝であった。

江戸中期以降、森町は古着の集散地として栄えた。これも森町から東・南・西いずれの道も東海道に繋がり、当時水量豊かな太田川が水運機能を果たし、地元物産のお茶・椎茸に加えて古着商人で賑わっていたと言われる。そのため幾つかの商人宿・お座敷料亭があって昭和二十年代まで残っていた。

森町の北端、城下（森町の中の字名）から天宮（同）を通って新町・中町・本町と歩くと、新町当たりから中町・本町には、屋敷の中や表通りから奥に入っている細い路地に面して建っている、白壁の土蔵が数多く目についた。

その白壁の土蔵は、遠州の富を集めていたと言われた森町の繁栄の歴史的遺物であったが、小生の子どもの頃は、その繁栄は既になく、どこの土蔵もその家の古くから伝わる品物の保管場所となっていた。

我が家の先祖も森町の大店の一つであった模様で、明治になる数年前、森町の物産であるお茶・椎茸を、開港したばかりの横浜で商い、九百五十二両（お米の単価で換算すると、現在の五千二百万円程度となる）を売り上げた記録が残されている。商号は鍋市商店と言っていた。

屋敷の奥に、明治元年に建てた白壁の大きな土蔵が今でもあり、家では「お蔵」と呼んでいた。

四年前、今は亡き従兄（森町長を四期連続で務めた）から、小生は「人の歴史を書くよりも、太田家の歴史を後世に残せ。俺やお前がいなくなったら、誰も分からなくなってしまう」と恰も遺言のような依頼を受けた。

その後、従兄の息子の協力を得てお蔵の中を調べると、明治二十四年の「無尽講」の書類が出てきた。

それは、現在のA三用紙六枚で長方形を作ったような大きさの和紙に、各辺から十五センチくらい中程に長方形を描き、恰も座席順を書くように、下辺に「講元」の氏名、その右に「世話人」として祖父の名前が書かれ、中央には「金額四百三十七円也」と講金額が墨書されている。紙の中に書かれた長方形の外側には、十名の参加者氏名が記載されている。良く見ると、今でも残っている家もあった。（注・・この四百三十七円は、現在の金額に換算すると二千万円を超すと考えられる）

無尽講は当時の庶民金融である。中には当時の森町役場を経由して静岡県知事の認可をえた「無尽講」も出てきた。県知事の認可を要する「許認可基準」は分からないが、おそらく一定金額以上の無尽講は、勝手に組成して、誰かが掛け金が続かなった場合の破綻危険を避けるために「許認可」が必要であったのだろうと考える。

祖父の役割の「世話人」とはどんな役割なのか、出てきた資料と見比べて考えてみると、無尽講の組成と、中途での破綻を回避する役割で、その無尽講が最後まで機能

を全うする責任を担う大変重要な立場にあったものと思われる。

というのは、明治十四年から二十年間くらいの間に、祖父が購入した「土地売買契約書」を丹念に読み込み、一覧表にしてみた。するとそこに「講参加者」氏名があり、日付も先の「四百三十七円」の講に記載してある日付よりやや後になっている。おそらく最初に講を落とした人が、あとの掛け金が続かなくなって祖父が肩代わりしたものではないかと考えられる。

日本の庶民金融史の中では、全国いたるところにあったこのような「無尽講」が、地域ごとに「相互無尽会社」に発展し、更に一九五一年に相互銀行法が公布され、それまでの「相互無人会社」が「相互銀行」に変わり、各地で「庶民の相互金融機関」として機能を果たし、現在では地銀（相互銀行から銀行への名称変更時は第二地銀と呼ばれていた）として役割を果たしている。

このように見てゆくと、祖父は北遠の商業地森町で、後世の相互銀行機能を果たしていたことになる。

祖父はその後「森町銀行」の頭取を務め、その銀行は第三十五銀行（現静岡銀行）に吸収されている。

祖父の四代前は「藤市」といい、家康から駿河・遠州の二ヶ国の鋳物師頭領の朱印状を得た鋳物師山田七郎左衛門の鋳場（鋳物工場）が、当時、森町三島神社の南にあった。太田家はその極近くに住んでいたことから遠州の一定地域で鍋を売る権利を得て、屋号を「鍋市商店」と名乗ったものと考えられる。それが代々「鍋屋」といわれる由縁であると思われる。参考までに森町には鍋がつく屋号で「鍋ごん＝漢字不明」と言われていた家もあり、小生が子どもの頃は太田家と親しい交流があった。

以上

自由執筆

「牛乳」と明治の二大文豪
― 鷗外・漱石 ―

諸橋　奏

日本は、幕末の開国（一八五四年日米和親条約）、維新（一八六八年）を経て、欧米の文化の摂取、普及に懸命であつた。

明治新政府の政策は、政治・経済・社会をはじめ、全ての分野にわたった。新聞や雑誌の発達もめざましく、近代文学も急速に花開いた。その代表は森鷗外と夏目漱石である。

鷗外（文久二年～大正十一年）は、明治二十一年（一八八八）ドイツ留学（衛生学研究）から帰国、翌年男爵・赤松則良（夫人貞は順天堂創始者佐藤泰然孫）長女登志子と結婚した。二十三年に『舞姫』を発表し、作家としても才能を示した。四十年には第八代陸軍軍医総監に進んだが、「脚気病細菌説」の誤謬で、終生の汚点を残した。しかし、こと牛乳に関しては、帰国草々の二十二年、創刊の「衛生新誌」に「牛乳は……母乳の不足を満たし、病人・老人に効果がある」と推奨している。また赤松家を介しての姻戚には、幕末、明治の医学界を担った人材が多数いる。当時は、牛乳は薬石であった。泰然の次男松本順（男爵・初代陸軍軍医総監）は予防医学の先駆者で、

健康増進に牛乳飲用を唱導、明治三年、伯父坂川當晴に東京初の牛乳店（五番町）を開店させている。六年に「牛乳搾取業」北辰社（神田猿楽町・牧場は麹町区飯田橋）が出来るが、これは順の姪林多津と結婚した榎本武揚らが興したもので、共同経営者大鳥圭介は、順と姻戚の緒方洪庵門下であり、武揚とは箱館五稜郭での盟友でもあった。洪庵の緒方塾（大阪・蘭学）門下といえば福沢諭吉がいる。諭吉は牛乳について、腸チフスに罹った折の体験から「牛乳の効能は牛肉より尚更に大なり。…実に万病の一薬と称するも可なり」と絶讃している。ところで諭吉の子捨次郎は多津の姪林きくと結婚しており、諭吉は武揚、則良と姻戚関係にある。

夏目漱石（慶應三年～大正三年）は、明治三十六年、イギリス留学（英語研究）から帰国し、東京帝国大学講師に就任した。三十八年「ホトトギス」に『吾輩は猫である』を連載し文名をあげた。四十一歳の時、朝日新聞に入社し『虞美人草』をはじめ、名作を発表したが、五十歳で胃潰瘍のため死去。「猫」の中で胃病によいと「一日牛乳ばかり飲んで暮してみたが、此時は腸の中でどぼりどぼり音がして、大水でも出た様に思はれて終夜眠れなかった」と記している。乳糖不耐だったのであろう。現在なら、胃粘膜の改善とピロリ菌を減少させる効果がある「乳酸菌LG21」入りヨーグルトで、漱石の胃病人生も変わっていたのでは？　漱石の親友正岡子規は牛乳と相性がよかったとみえ、「牛乳屋を保護して牛乳飲用倍、三倍増を」と病床で訴えている。

子規門下の伊藤左千夫は明治二十二年、本所区茅場町（現錦糸町駅辺）で牛乳搾取業を始め、これを生業としている。

漱石門下の芥川龍之介は明治二十五年、京橋区入船町（現中央区明石町）の牛乳販売店、新原敏三とふくの長男として生まれたが、偶母の病で、本所区小泉町（現墨田区両国）の母の実家で育てられ、十二歳の時、芥川家の養子になった。

同門の久米正雄は「新思潮」（大正三年）に載せた『牛乳屋の兄弟』が好評を博し、新進作家入りを果した。

鷗外・漱石が明治の二大文豪と称される所以は、二人が文学作品を通して日本の近代文明を鋭く批判、それが現代に通じるところにあるといわれる。「牛乳」はこの二人の何分かの滋養になったのであろうか。

祝　出　版

史遊会［編］

『歴史のみち草』

埋もれた真相に挑む

発想をかえると見えてくる

歴史の一コマを掘り起こす

エッセイ集

彩流社

定価（二八〇〇円＋税）

※事務局だより

4月の例会は『歴史のみち草』の読後感想会です。そのため4月以降の講演予定は一ヶ月ずつずれ込みますのでご注意ください。但し、執筆予定者は変更ありません。友の会員も原稿をお寄せください。